

'86 ハワイ・アイアンマン・トライアスロン

念願のアイアンマンになれた

下田智明（鳥取県）

「五ツイッ」というボランテニアの
声が聞こえた。ふと時計に目がい
く。暗闇の中で腕時計のライトを
つけると、スタートして11時間21
分後を指している。五ツイコー
ル八。か、キロ5分ていくと11時
間台でゴールできるかも知れない。
「もうひと息だ、がんばろう。ゴー
ルでは応援の人々と万歳をしよう」
もう少しでアイアンマンになれる
んだ。やっとここまできたんだ。
そんな思いが次々と頭の中をかけ
めぐり、胸がジーンと熱くなった。
心の底からこみあげてくるものが
あった。

二年前に始めた毎日の早朝ラン
ニング。その頃は水泳は百計がや
つとであつたし、ロードレーサー
にも乗っていなかった。それが今
こうしてアイアンマンになろうと
しているとは。予想すらしなかつ
たことである。しかし、早朝ランニ
ングを始めたその年にホノルルマ
ラソンを完走し、それからのトラ
イアスリートへの道は思いがけず
とんとん拍子に進んでいった。日
本のトライアスロン元年ともいえ
る'85年、宮古島にはふられたもの
の、びわ湖に初挑戦。台風の中、最
悪のコンディションという状況下
でなんとか完走した。その後は'85、
'86年の皆生、'86年宮古島、びわ湖
を経てハワイへの出場権を獲得し
た。

長い一日だった

レース当日。快晴、エメラルド
グリーンの海、絶好のコンディシ
ョンである（ただ、自転車とマラ
ソンでは暑くなるだろうなと一抹
の不安をおぼえたが）。ゼッケン
を書いてもらいスタート地点に立
つともう心は宙に浮いていた。さ
あ、いくぞ！と気合いを入れる。
まもなく号砲と「ウォー」という
まわりの大歓声に刺激されて、自
分も「ウォー」と叫びながらこぶ
しをあげてスタートした。

水泳は、私にとって最も苦手な
種目であるので、あせらずさわが
ず、スローペースを保った。海は
透明度がバツグンで、宮古島の海
に負けず劣らずとても美しい。魚
が泳いでいるのがハッキリ見え、
自分も魚になったような気分にな
る。高石ともやさんの「人は海に
生まれて、波に揺られて眠り……」
という歌詞を思い浮かべながら泳
いでいると、身も心もコナの海に
溶け込んでいくようであつた。水
泳では殴られる、蹴られるのを覚
悟していたのだが、予想に反し快
適に泳げた。特に折り返して後半
は、まわりに人が見えなくてコー
スを間違えたかと思うほどであつ
た。それもそのはずで、後で水泳の
順位を見たら900番台と、最後尾の
方を泳いでいたのである。そんな
こととはつゆ知らず、水泳をフィ
ニッシュ。タイム・1時間37分を
「まずまず」と自己満足しながら自
転車へ……。そういえば自転車は
ほとんど残っていなかったようだ。
二種目めの自転車が一番不安だ

つたのは、体力よりもまずパンク
であつた。コースの下見で「コナ
の風は強いから溶岩のカケラが飛
んでくるよ」とおどかされていた
ので、より一層不安がつづいてい
た。しかも私のバイクは前後輪の
大きさが違うホイールのフアニー
バイクなのだ。そのためコナで新
品のチューブラータイヤを一本購
入し、全部で四本用意。二本を自
転車に、残り二本をウェストバッ
グに取り付けて万全を期した。こ
れでいくらか気持ち楽になった。

コナの町を声援に励まされなが
ら、自慢のフアニーバイクでカッ
コよく駆けぬけてゆくと、そこは
もう延々と続く恐怖の溶岩地帯で
あつた。行けども行けども同じ景
色ばかりでいいかげんに退屈して
いたところ、ようやく建物が見え
てきたと思いきや、今度はダラダ
ラと続く上り坂。この頃になって
トップグループとすれ違うようにな
つた。トップはやはりダントツ
でデイブ・スコット。その後、少
しして二、三台、あとは次から次
へ。誰が誰だかわからなかった。

折り返した自転車は、下り坂なの
でビュンビュンと気持ちよさそう
に飛ばしてくる。それを横目に、
折り返しはまだかまだかと坂道と
コナ・ウィンドの二重苦に行くて
をはばまれながら登って行った。
ようやく折り返しがみえると、や
つと登り坂が終わったんだあ」と
ホッとした。

しかし、平坦な道に出てもギラ
ギラと輝く太陽の照り返しと果て
しなく続く単調な道に悩まされ、
まるで自分が砂漠のまっただ中を



さまよっているように思えた。その中で唯一のオアシスとなったのがエイドステーション。このボランティアたちは、やはり本家本元らしく、ボトルや食物を渡してくれるタイムリングがとていい。それに道路が広く直線なので細長くエイドステーションが設置してあり、取りそこねても、また取り直しができた。コナの町まであと十*ぐらいの場所であわただしいヘリコプターの音がして、まもなくトップのデイク・スコットとすれ違った。彼はマラソンでも依然としてトップを堅持している。私がまだ自転車を一〇*余り残しているというのに、もうマラソンの折り返し付近(二五*)まで来ているのだ。2位の選手は?と目をやったが、すぐにはやってこない。だいぶ遅れてティンリーが見えてきた。かなり疲れている様子であった。コナの町へ入るころになると、今度は日本人のトップグループと続々とすれ違う。まず城本、続いて山本、梅沢、飯島、毛利……予想どおりのメンバーだった。最後のマラソンは、三種目の中では比較的得意とする種目だ。歩かなければ、たとえエイドステーションで立ち止まっても、4時間30分以内でゴールできるだろうと思っていた。

一番の難敵は暑さであった。前半は押さえぎみに、エイドステーションでは水をしっかりとろりながら走る。マラソンのエイドステーションは一*ごとの短い間隔で設置しており、非常に良かった。ことにコナの町を出てからは人気のない溶岩地帯を走るので、エイドステーションのボランティアの声援だけが心の支えだったのだ。日本語のできるボランティアや小さな子供のボランティアもいてとても親しみやすかった。マラソン・スタートのコナ・サーフ・ホテルからコナに至る間に、もうトップのデイク・スコットは、8時間30分を切る好タイムでゴールしていた。私はといえば、コース上には距離表示がなかったため、自分の足どりと時計を頼りにおよその距離を考えながら走った。

ゴールに近づくと元気に

やがて日射しが柔らかくなる頃、水平線に沈む夕日を右手に見ながら、ゴールはどんな風にして入ろうかという思いをめぐらした。とにかく今度は進めば進むほどにゴールが近くなる、折り返しはもうないんだ、とそんなことも考えた。まだ折り返し点に向かっていて日本人とすれ違うと「あと〇分くらいで折り返し点ですよ。ガンバってください」と声をかけながら、自分の足よりも軽くなった。もう、あたりは真暗闇。螢光スティックをもらい腰につけて走り続けるだけだ。不思議と足は痛まない。体力もまだあった。闇の中をいくつもの螢光スティックが、まるでホタルのように行きかった。そのホタルの中をぬうように、私のホタルは快調にとばした。もうすぐ完走できるんだ!「やっとなのアイアンマンになれるんだ!」そんな思いでいっぱいであった。

「五*!!」と声をかけられてからコナの町らしい明かりが見えるまではさほど時間を要しなかったが、その明かりが見えてからコナの町にたどり着くまではとても長く感じられた。コナの町へ入った時はスタートしてから12時間(午後7時)を過ぎていた。11時間台の夢は破れたが、それでも予想を上回るペースである。上出来だ。あとは、ゴールまでの時間を楽しもう!そんな気持ちであった。食料品を買った「タニグチスーパー」(コナ・コースト・ショッピング・センター内)の前の下り坂を駆けおりる。左へカーブして声援の人に手を振る。ゆるやかな上りを最後の力をふりしぼって駆け上がり右へカーブ。今度は下って、もう一度右へカーブ。いよいよメイン・ストリートだ。ゴールまで四百*あまりだ。左右の歓声に手を振りながらゴールへ向かった。モクアイカウア教会の前を過ぎると歓声もひととき大きくなった。見え見えだ!「ゴールだ!!」

思わず道路わきに設置されているスタンドの応援席の方に駆け寄った。特に知っている人がいたわけでもなかったが、応援してくれている人々と、誰かれかまわず全てのひとと手を合わせた。野球でよくやるホームランの迎ええシーンのように。バシッ、バシッ、バシッ! 思いきり手を振り落とした。「万歳」のことはどこかへ忘れてしまっていた。 やった! やった! とにかくやったんだ!! 「ありがと! ありがと! 応援をありがと!!」

ただ、ただ、そんな気持ちで思いきり手を振り落とした。最後は右手を高く突き上げてゴールイン!! 12時間10分47秒だった。アイアンマンだ! というアイアンマンになったんだ……!!

